



甘言



香具師

川崎ゆきお

「諦めなければ可能性は無限にある」

「甘言ですなあ」

「そうではない。嘘だと言うことは分かっています」

「はあ、何と」

「勢いですよ。それが大事だと言っているのです」

「では言葉通りではないと」

「はい」

「大きな魚だが、食べられる箇所は少ない。あなたの甘言の甘さを抜けば、どの程度残りますか。正味が」

「はい、まあ、希望を持ちましょう程度です」

「希望が持てないので、諦めるのではありませんか」

「だから、希望の中身は何でもいいのです。小さくても大きくても、叶っても叶わなくても。そういうものを持っている方が、生きやすいのですよ」

「かなり目減りしますなあ」

「はい、大きい目に言った方が元気が出ますのでね」

「うむ、それもそうじゃが、わたしにはどんな可能性が無限大に広がっておるのですかな」

「何か可能なことがありますか」

「え」

「だから、こういうのが欲しいとか、こういう人になりたいとかで」

「それらは有限でしょ」

「だから、幻想でいいのですよ」

「それでは約束が」

「持ち続けることが大事だと言っているのです」

「ああ、気の持ち方ですか」

「そうです」

「だから、その気になるようなことが、あまりないのですがねえ。どうせ、それをやっても無理だと諦めてしまいますよ。年齢的にも無理なことがありますしね。それに素質や人脈がなければ出来ないことが多くあるでしょ。そのあたりを考えると出来ることなど僅かです」

「それをやられたらよろしいかと」

「つまり、出来ることをですな」

「はい」

「狭い範囲になりますが」

「狭くても、様々なもの、遠くのものとも繋がっているものです。そこは可能性としては難しいかもしれませんがね」

「あの世と繋がっているとか」

「それでも構わないですよ。これは来世のために役立つとか、あの世へ行ったときに効果が出るとか」

「あなたは、神秘家ですか」

「いえいえ、その人が、そう思えるのなら、それでよろしいかと」

「やはり、心持ちの問題なのですね」

「はい、そうですねえ」

「はっきりしないのですか」

「はい、ハッキリですから」

「ハッキリ」

「少し元気になれば、それでいいのですよ」

「では、意外と地味で、ささやかなことを考えておられる人なのですね。あなたは」

「そうですねえ。気持ちが少し楽になる。良くなる。その程度のことですよ」

「じゃ、下手な香具師より始末が良いと」

「実用性がありませんからねえ」

「うむ。それは正直でよろしい」

「空元気でも何でもいいから、身体はそれで引っ張られます。だから、一種の健康法だと解釈されても結構です」

「いえいえ、あなたは神秘的なものを取り込まれておられる。現実には叶えられない可能性、それが錯覚や幻想でも良いからとおっしゃる。このあたり、味わい深いものがありますぞ」

「恐れ入ります」

「では、うちのゼミナールにも来てもらいたい」

「はい、気合いを入れに、参上します」

「よろしく」

了